

特別寄稿

カリフォルニア大学教授 中嶋 嶺雄

クリントン政権になっても経済が一向に改善されないためか、アメリカではこのところ、犯罪が急増している。一連の犯罪のなかで最近目立つのは、銃による殺人である。カリフォルニア中部のフレズノのクラブで七人が撃ち殺された、私もよく買い物に行くスーパーマーケット「ラルフズ」の別のチェーン店の脇で一人が撃ち殺された、といったニュースを連日のようにTVは報じている。五月二十六日付「ニューヨーク・タイムズ」によると、アメリカ国内には二億丁以上の銃が出回っており、年間三万四千人前後が銃によって殺されているというのだから、連日の事件は当然のことなかもしれない。

服部君射殺に無罪評決

こうした拳銃社会としてのアメリカの恐るべき断面を露出し、前途に満ちた十六歳の日本人少年が犠牲になった痛ましい事件が、ルイジアナ



州のバトンルージュで昨年十月に起こった服部剛文(よしひろ)君の射殺であった。そしてこの事件で「故殺罪」に問われて起訴されたロドニ

拳銃社会の悲劇と矛盾

連日の事件と家庭の自衛

・ピアーズ被告(三十一歳)にたいしては、すでに詳しく報じられたように、この五月二十三日、ルイジアナ州の陪審十二名が揃って無罪を

旭丘高校二年生の服部君は、高校生留学では最も評価の高いAFS(アメリカン・ワールド・サーヴィス)の留学生なのであった。今回の裁判は、去る三月十五日から始まっていたけれど、時間の経過とともに被告への同情が現地では高まっている

判を左右するからである。そしてルイジアナ州の市民たちは、自分の家庭の安全が脅かされると思った場合、それを銃で守るのは当然だという感情論にこのところ大きく傾いて来ているのである。というところになると、父親の服部氏が剛文君の悲しい死を無駄にしてほしくないという痛烈な心情において呼び掛けられた、アメリカ社会から銃を追放しようという運動が多くの人々の共感を呼んで広がっているという報道と大きく矛盾する。

ことだよ、と平然と語っておられた。この事件に大きな衝撃を受けていた私は、そのときのK先生の言葉には強い抵抗を感じ、とうてい納得することができなかった。私事にわたって恐縮だが、わが家の四人の子供たちも全員AFSの留学生として高校生時代にアメリカへ行っていたので、この事件が他人事ではなかったからでもある。しかし、アメリカ社会に身を置いて眺めていると、客観的事実としては、K先生の見方がやはり正しいように思われる。

所持登録制にも反対論



そして残念ながら、そのような共感は、今日のアメリカ社会では、まさに大海の一粟にしか過ぎないように私には思われる。第一、この事件もアメリカでは十分に報じられなかったようであり、私の周辺のアメリカ人のほとんどが、この不幸な出来事について知っていない。

この事件が日本で報じられた夜、私は東京のホテルで外交問題の研究会に出ていた。食事のあいだの話題になったとき、私の恩師でもある有名な政治学者のK先生は、アメリカでは銃で身の安全を守るのは当然の

るといわれていただけに、遺憾ながら、無罪の評決はほぼ予想どおりであった。裁判上の争点は、被告の射殺行為が刑法違反かどうかであったが、去る四月十七日のロサンゼルス黒人殴打事件への評決にも見られたように、アメリカでは、社会的・政治的考慮が往々にして裁

評決したのである。この事件は、freeze、(動くな)と言う一般には英語の辞書にも出ていないアメリカ英語を知り渡らせたことでも話題になったが、愛知県立

【写真】裁判所に入る服部君射殺事件の被告夫妻。事件はまだ尾を引いている。